

2 ^{しこくまい}紫黒米新品種「ゆかりの舞」栽培の留意点

ねらいと成果

現在普及している紫黒米品種「むらさきの舞」より栽培特性の優れた新品種「ゆかりの舞」の安定栽培基準を検討した。

適切な施肥は、窒素成分で基肥に4 kg/10a、出穂20日前に穂肥を4 kg/10a施用する方法である。また、植付本数は6本程度と多くする。

紫黒米は収穫適期の目安である青味^{あのみもみりつ}率の判定が難しいが、籾にわずかでも緑色部分が残る籾を青味籾とし、青味率^{あのみもみりつ}が10%以下の時期が、収量性や玄米色の点から適切であると判断した。

内容

(1) 施肥基準

2007～2008年の2か年に、窒素成分で基肥4 kg/10a + 穂肥4 kg/10a施用の処理区1と基肥6 kg/10a + 穂肥4 kg/10a施用の処理区2を標準区（基肥4 kg/10a + 穂肥2 kg/10a）と比較した。

倒伏は全区で認められず、植付本数は6本植の方が3本植より多収であった（データ省略）。

図1のとおり、精玄米重は処理区2が最も多かったが、下葉が過繁茂となった。また、処理区1との収量差はわずかであった。玄米色は分光色差計のL

値（明度）で比較したが、全区とも差がなかった。L値は低いほど明度が暗く、紫黒米の場合は玄米の黒紫色が濃くなる。収量性や生育及び玄米色の点から、適切な施肥法は基肥4 kg/10a + 穂肥4 kg/10aと考えられた。

(2) 収穫適期基準

紫黒米の登熟過程の籾色は、出穂時は緑色で、登熟が進むにつれて、黄土色と黒色と緑色が混ざった状態になり、成熟すると黄土色になる。

出穂後30日目（青味率91.2%）から63日目（青味率4.9%）まで2～7日ごとに収穫を行い、収量と千粒重と玄米色を調査した。図2のように、わずかでも緑色の部分がある籾を青味籾とした。青味率が10%以下になると収量や千粒重は最大となり、L値は低くなった（データ省略）。

普及上の注意事項

他品種への混入を防止するため、同一ほ場で栽培し、収穫や乾燥調製時にも十分注意する。

穂いもちが発生しやすいので、適切な防除を行う。

池上 勝（農産園芸部・酒米試験地）

（問い合わせ先 電話：0795-42-1036）

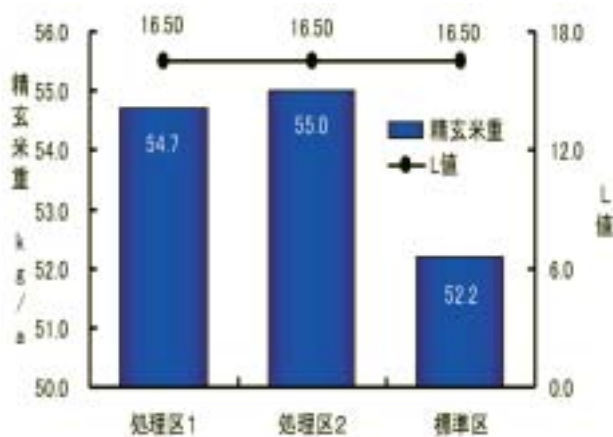


図1 精玄米重及び玄米色（L値）



図2 「ゆかりの舞」の青味籾
（注）完熟籾は左2列、青味籾は右4列